Vol.9 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



コミックと小説の新コーナー、絶好調です!!

RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!! そんな欲ばりなあなたのためのコーナーです!!

CONTENTS

FANTASY LAND

Wizardry®



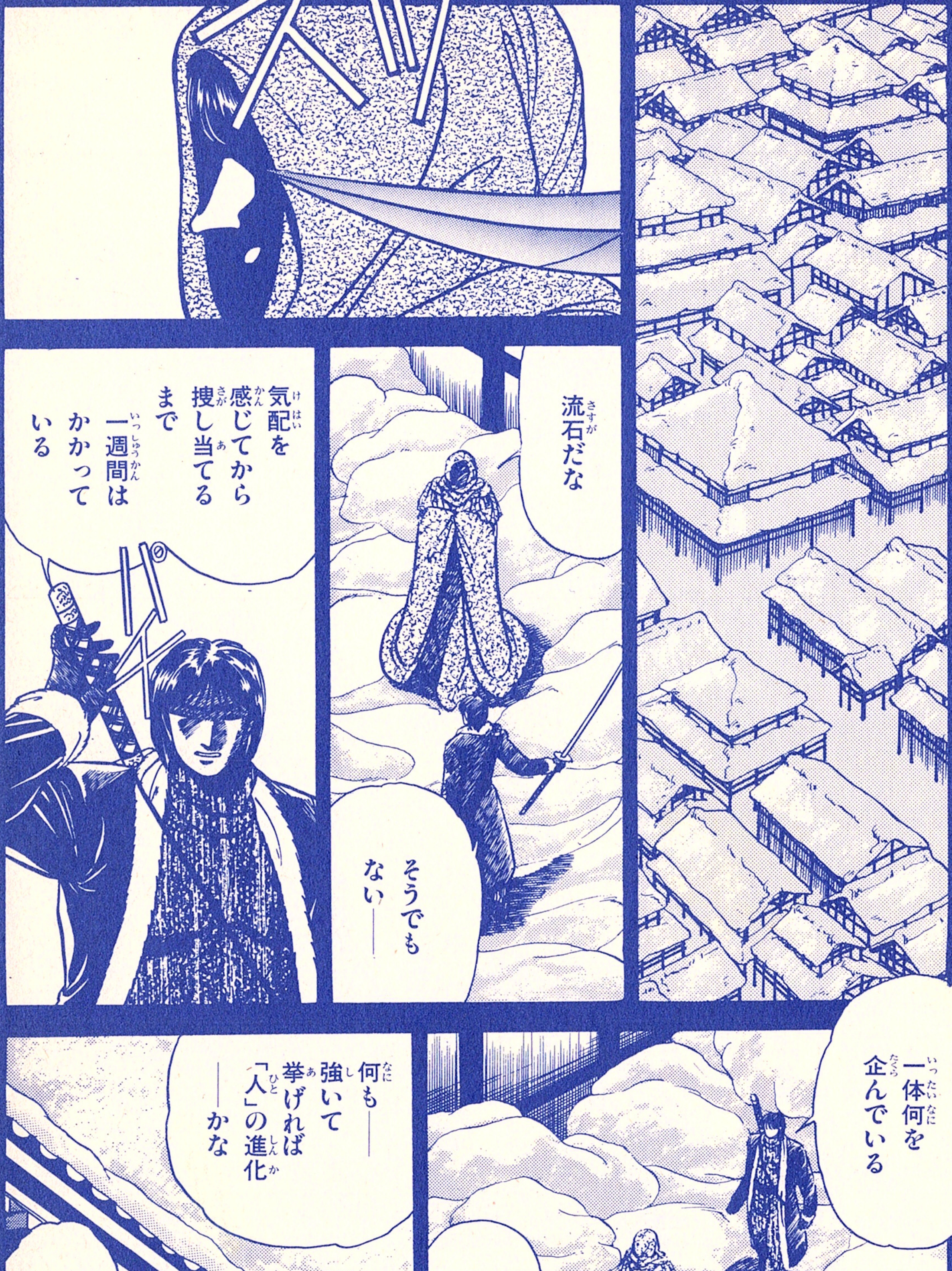
ウィザードリィ外伝　第2部

鳳凰の塔

第5話「迷妄」　作／石垣環

ケイヒ

性別：女
職業：侍
属性：悪
性格：執着
種族：人間族


流石だな
そうでもない――
気配を感じてから捜し当てるまで一週間はかかっている
一体何を企んでいる
企む?
何も――強いて挙げれば「人」の進化――かな
進化?



戯事を——
俺が訊きたいのは——
何故自分でギルを斃さなかったのかと云うことか——
世事への干渉は最小限に留めねば
「転移」を唱えられ——
しかも・・・あの状況から四人全員を救い出す程の能力を持ちながら
何故に他人の能力を頼らねばならない!
「人」は歪んだ道を辿ることになるのでな
ほう——


「人」の手になるものは「人」の手によってなされねばならない
「人」にあらぬ者に全てを委ねるならば
「人」は自身の未来への道を自身の手で閉ざすことになるであろう
私とルケブレスがなした行為はなすべき「人」を選んだに過ぎない
なすべき「人」ルケブレスの云っていた守護者のことか——
まあ——そういうことになるな……
では問う！守護者とは何だ！
何故に俺達四人が選ばれた！


守護者とは言葉そのままの意味——
つまりこの世界の均衡を守る者のことを言う
汝ら四人が選ばれたのは修得能力が卓越していたから
つまり見込みがあったからだ


修得能力？見込み？
誕生時よりの成長過程を見ていれば・・・判るものよ
成長過程見ていれば判るだと——
カッ
一体貴様は何者——
顔を見せろ！


我は――数多の眼 数多の耳 数多の顔を持ち――
数多の場所 数多の時間とともに存在する――
我は我なり 我は汝なり 汝は我なり
ゆえに我あり


ギャ
ショウ!
クッ!


鳳龍（ほうりゅう）


渦旋斬(かせんざん)！
オオオオ




ショウ！
何ボーッとしていたんだ
「塵化」を唱えろって云ったのが聞こえなかったのか？
す、すまん——
——ったく、近頃——
ショウ
怪我の手当てしましょ
ん——
邪魔された・・・・・


ああ——
いいよ
これで
十分だ
まあ
生きてるんだから
良しとするけど
気をつけてくれよな
判ってる
それより
先に進むか
テツも
大分慣れたようだしな
そうだな
・・・ふりだしに
戻されるかもしれんが
もう少し進んでみるか
んじゃ
行こか


ケイヒ！
何故殺らない
あんたが
殺らないの
なら――
スッ
俺が――
・・・私の命に
・・・従えと
・・・云われて
・・・いるはずだ
それに
・・・・その程度の
・・・・腕では
返り討ちに
遭うのが
落ちだ
パチッ
・・・・・・


そんなにいきり立つなよ
このような屈辱を受けてもか!
バアカ!
せっかく蘇生した生命を捨てるつもりか?
うっ
オレは百年ぶりの娑婆だ簡単には死にたくねえな
女だてらに侍で——しかもオレ達を頤で使う
腹に据えかねるのはお前だけじゃねエ——
——が相手が悪過ぎる
鳳龍家の血筋だぜ
それにケイヒが寺院に収容された理由
知ってるか?
い、いや


当時オレは
十二・三
だったが
有名だった
ぜ
父殺しの
女侍って
な――
内証話は
終わったか
――
無駄話を
するなとは
云わぬ
――が
一瞬の心の
弛みは
！
！
「死」にも
繋がると


知(し)れ！
天竜(ティエンルン)！


散開だ！


鳳龍百撃斬！


ゴロゴロ
クッ
チイッ
塵化（マカニト）！


ぐへっ
ペッペッ
こいつら
どーする？
ケイヒ
捨てておけ
な、何！



仮にも仲間じゃ
この程度の攻撃を躱せぬ輩など
幾度甦らせても役には立たぬ
無駄なことはせぬ方が良い——
そうだなケイヒが正しい
行くぜ


明らかに今までと造りが違うな
ひょっとして塔に続く廻廊――
あり得るな――
その前に



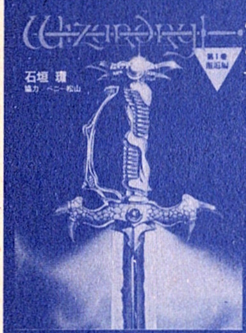
いよいよ塔へと向かう一行の前に!! 次号を待て!!

次号(Vol.10 5月2日発売)につづく!! TO BE CONTINUED

Come On! Wizardry® World.

ウィザードリィ、その偉大なるコンセプトがここに。

第1巻 邂逅編　定価906円



第3巻 黎明編　定価900円



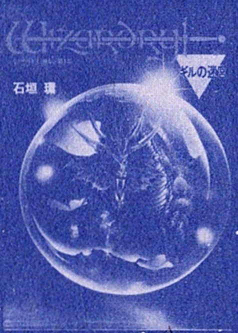
第2巻 死闘編　定価906円



コミック版
ウィザードリィ
石垣環・作
ベニー松山・協力

このコミックが、ウィザードリィのキャラクターたちに新たな命をふきこんだ。剣と魔法の世界の幕開け、そして冒険者たちの命をかけた闘いが、いま始まる……。ＣＰＵよりも胸にせまる、迫力です。

ウィザードリィ外伝第1部



ギルの迷宮
石垣環・作
定価900円

コミック版ウィザードリィ最新作、ついに登場。……ホウライ国の若き侍、ショウとリルガミンの姫将軍ルーシィディティの宿命の戦いが始まろうとした瞬間、２人の身体は奇妙な迷宮へと転移させられる……。

小説ウィザードリィ



隣り合わせの灰と青春
ベニー松山・著
定価1010円

プログラムに封印されたウィザードリィの魅力を、活字が解き放つ。これがＲＰＧ文字の最高峰だ。……漆黒の世界からの覚醒、血潮冷えし肉体に宿る、蒼い魂。評論家各氏賞賛の新世代ファンタジー！



ウィザードリィのすべて
ベニー松山・著
定価1200円

ファミコン移殖版ウィザードリィのすべてがわかる完全攻略本。迷宮世界の森羅万象を徹底解析。Ⅰ「狂王の訓練場」Ⅱ「リルガミンの遺産」を収録したこの１冊、ウィザードリィ探索者の心強い道標です。

ＪＩＣＣ出版局
書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい　☎03-234-4621 ※価格はすべて税込みです

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

by柴尾豊太郎

この本を読め!!



第五回『クラインの壺』

岡嶋二人著　新潮社

究極のゲーム機、ミステリーに登場！

この本がでたのは去年の十月で、年末のミステリーベストテンなどで取り上げられ、かなり話題になったため、とっくに読んだという人も多いだろう。

一言で言ってしまえば、究極のゲームと、その開発にまつわるミステリアスな展開で、ぐいぐいと読ませる本なのだ。

「それはベッドと言うより、人間の型を取る装置のように見えた。鯛焼きの鋳型が人間の形に作ってあるみたいだ。手足があり、頭がある。頭が手前にあり、手と足が自然に開いたような形で筒の奥へ伸びている。ベッドの外側——つまり側面は丸みのある金属で、そのまま筒の底にはめられている。ベッドの内側には布団の代わりに、目の細かいスポンジ状のマットが詰めてある。スポンジはクリーム色をしていた」

この『クラインの壺』という擬似体験ゲーム機には視覚、聴覚、嗅覚、触角のすべてを実生活と同様に味わえる機能があり、ソフトによって、あらゆる体験を現実とみまがうほどリアルに味わえるのだ。だが、それほどのちからのゲーム機には恐ろしい秘密があり…。ここから先は読んで楽しんでほしい。

もちろん読んで楽しめることは間違いないんだけど、いくつか引っ掛かることがあった。それはぼくがＳＦ、ファンタジーのファンであるところからくるものと、ゲームのファンであるところからくるもののふたつだ。

まず、ゲームのファンとして感じたものは、はたしてこんなゲーム機があって、心底楽しめるものだろうかということ。

昔、誰かが言っていたことだけど、「自分はスポーツのゲームは作りたくない。なぜなら、スポーツというものは自分が実際にやって楽しむものであり、ブラウン管のうえでどんなにリアルにスポーツを再現したとしても、本物のスポーツには絶対にかなわないからだ」

百パーセント肯定はできないが、卓見というべきだろう。それがリアルな冒険であればあるほど、実際になぜ、行動によって楽しまないのかという疑問が強烈にわきあがってくる。

また、たとえばＲＰＧ的ファンタジー世界を擬似体験（これは体験することはまず不可能なんだけど）できるとすれば、うれしいと思う人もいるかもしれない。でも、そんな人は人間の想像力のすばらしさを理解していない。ファンタジーの世界は、人の想像力を刺激するから楽しめるのであり、それが実体験と同様にできてしまえば、ある意味で虚しいものになってしまう。

つぎにＳＦ、ファンタジーファンとして感じたものは、ああ、ミステリーは気楽だなということ。

この本をストーリーの面からとらえてみれば「胡蝶の夢」ものといえる（胡蝶の夢については、国語の先生に聞いてみようぜ）夢かうつつか幻か。同じ話をＰ.Ｋ.ディックが書けば悪夢のような世界が展開されるのに、ミステリー作家の作品だけあって、謎解き的な展開になっている。

まあ、このことは決して作品を陥れる意図はなく、逆に新鮮に感じられたわけだけどね。



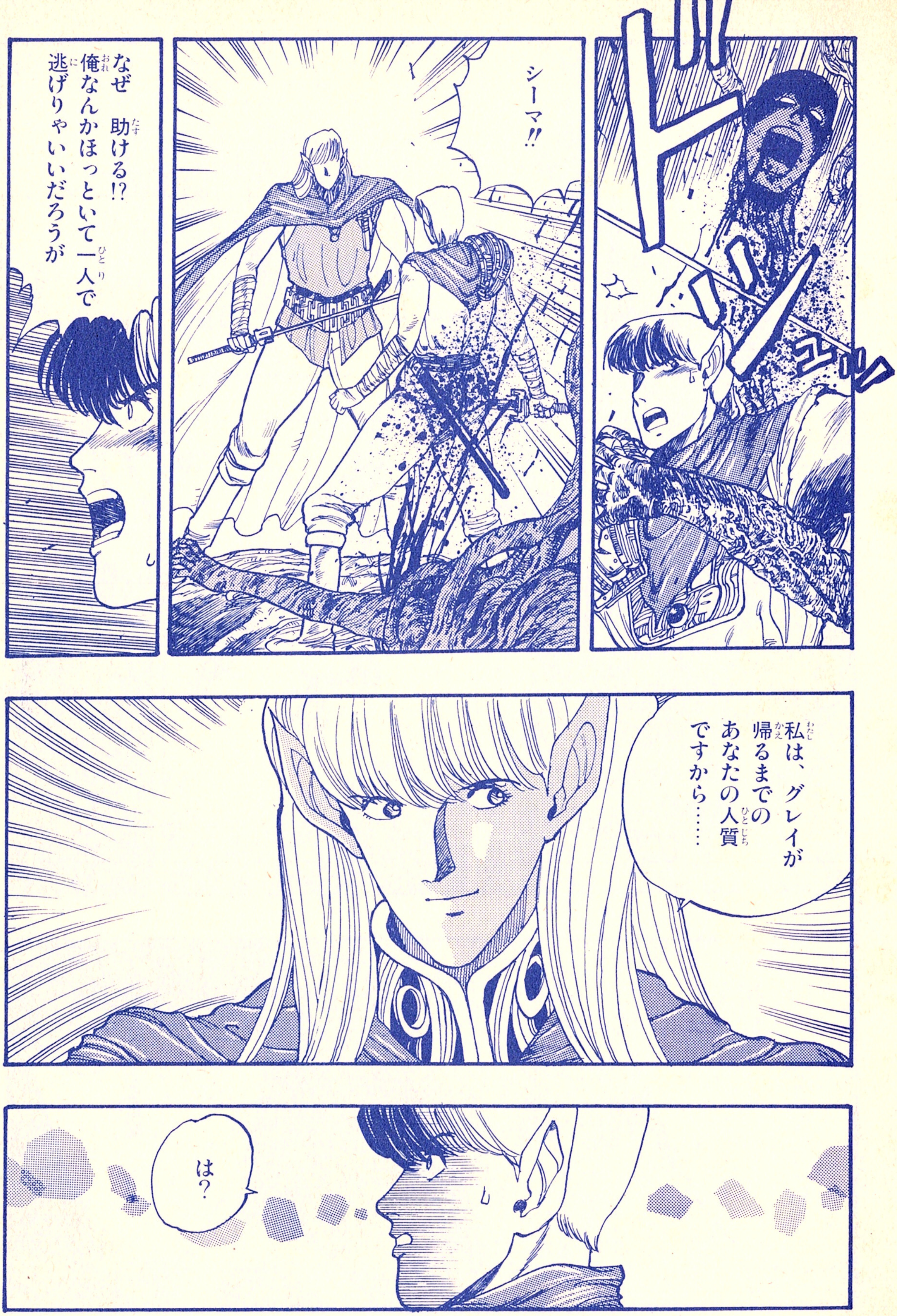
➡「クラインの壺」岡嶋二人著、新潮社、新潮ミステリ倶楽部（1300円）究極のゲーム機「クラインの壺」そのソフト開発に呼ばれたゲーム作家、上杉彰彦は恐るべき陰謀に巻き込まれる。前半「アンドロメダ病原体」のり、後半ディックのりといえば、わかる人にはわかるかもしれない

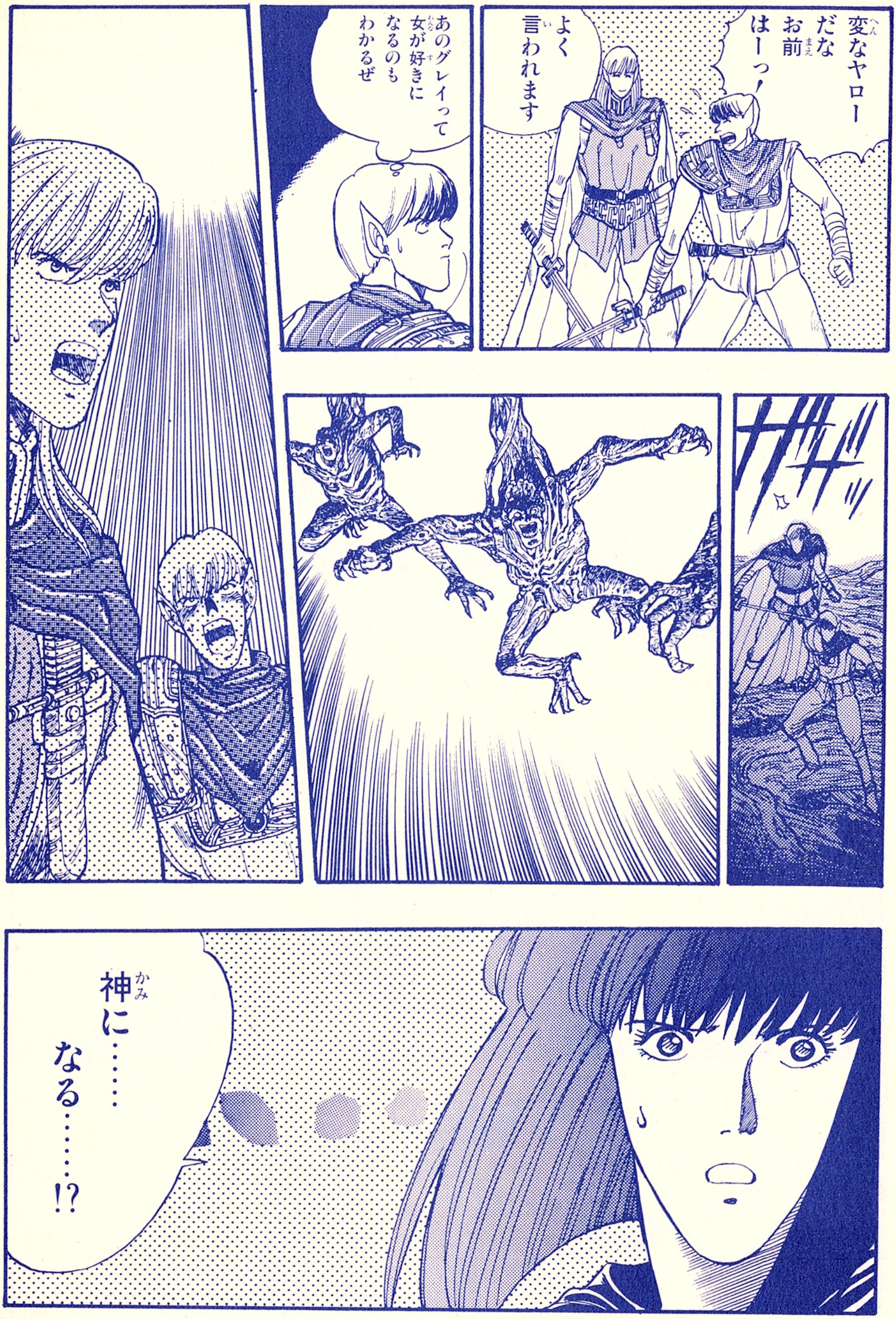
いよいよグレイとアクィナスとの戦い開始。迫力の第五回!!



●前回までのあらすじ／妖精族のシーマと女魔法使いのグレイは「大喰らい」の拡大を止める手がかりを求め、かっての師・フレシアを訪ね、〝ネルザの森〟へ。しかし師は殺され、そこには変わり果てた、昔、兄と慕ったアクィナスがいた。


うわあ〜っ

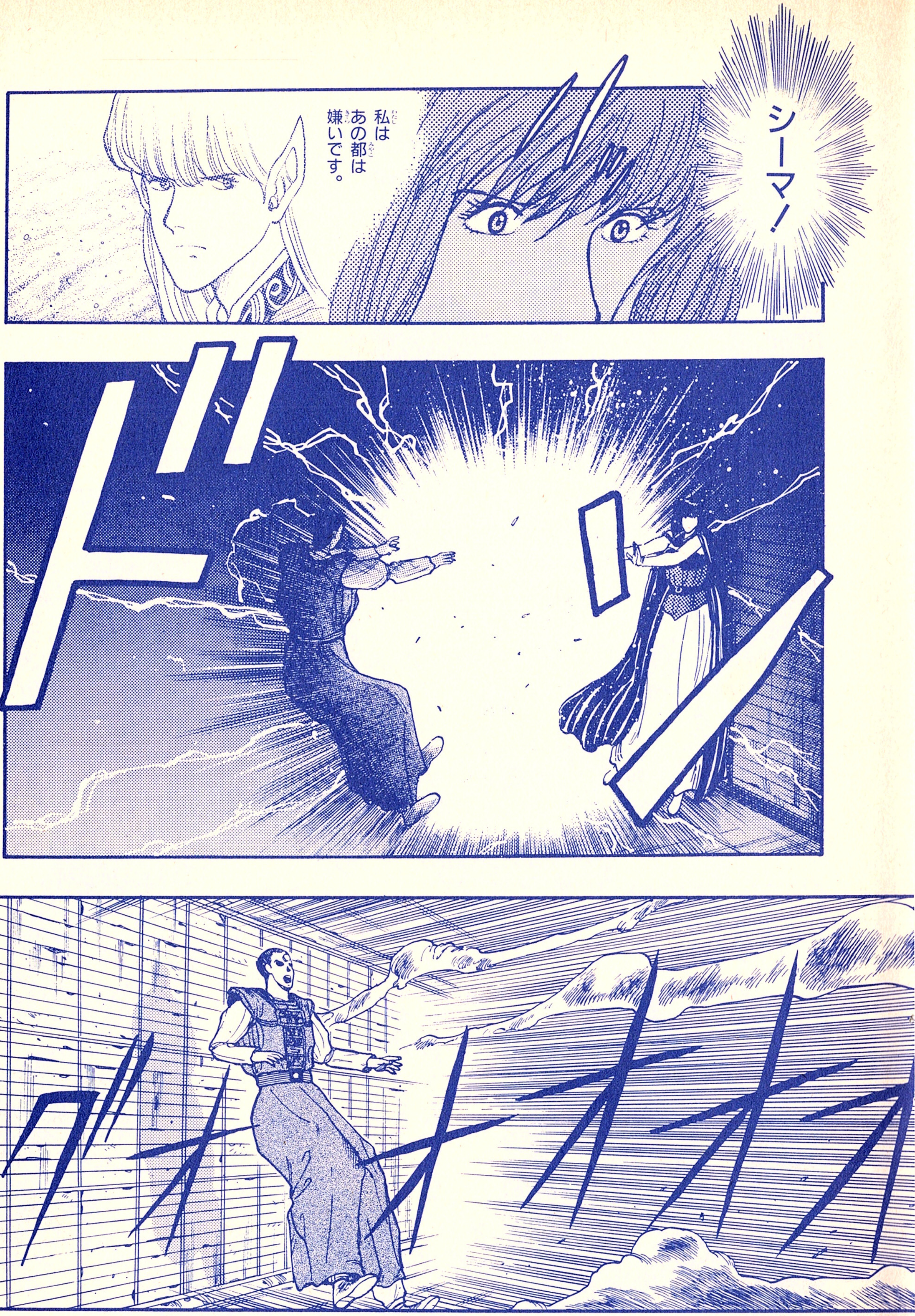

ドシュッ
シーマ!!
なぜ 助ける!? 俺なんかほっといて一人で逃げりゃいいだろうが
私は、グレイが帰るまでのあなたの人質ですから……
は?



変なヤロー
だな
お前
はーっ!
よく
言われます
あのグレイって
女が好きに
なるのも
わかるぜ
ザザッ
神に……
なる……!?


そう！・・・・神になるのだ！
大喰らいを消し無限のマナに持ちこたえられるよう 自らをつくりかえるのだ！
卑金属が金に変わるように 永遠に滅びる事のない体と魂を手に入れるのだ！
永遠にー！
グレイお前は、シーマとかいうエルフに恋してるんだろう
くっくっくっかわいそうになぁ
エルフは、200才近くまで、あの若さを保ちつづけ そして死んでゆく……
エルフに恋した人間がどうなるかお前もよく知っているはずだ


人間は、いくら
がんばったところで
90が、限界だ
それも　よぼよぼに
老いぼれてな
だが　エルフはあの若く
美しい姿のままだ
はたして、
みにくく老いさらば
えたお前を　シーマは
愛し続けてくれるか
なぁ
私に
協力しろ
グレイ!
そして、
永遠に
若く
美しい姿
のまま、生きつづ
けるのだ!
グレイ!!

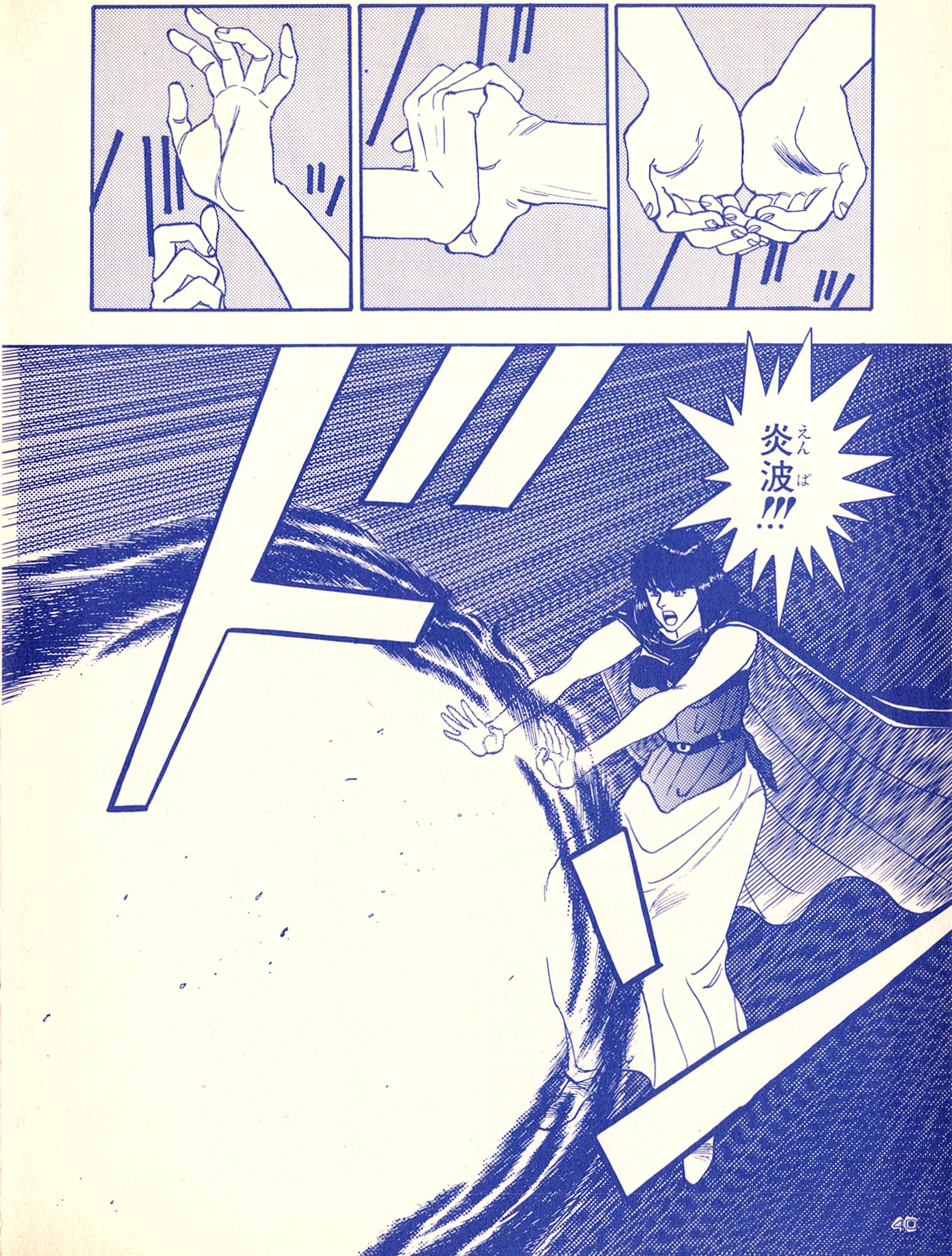

シーマ！
私は あの都は 嫌いです。

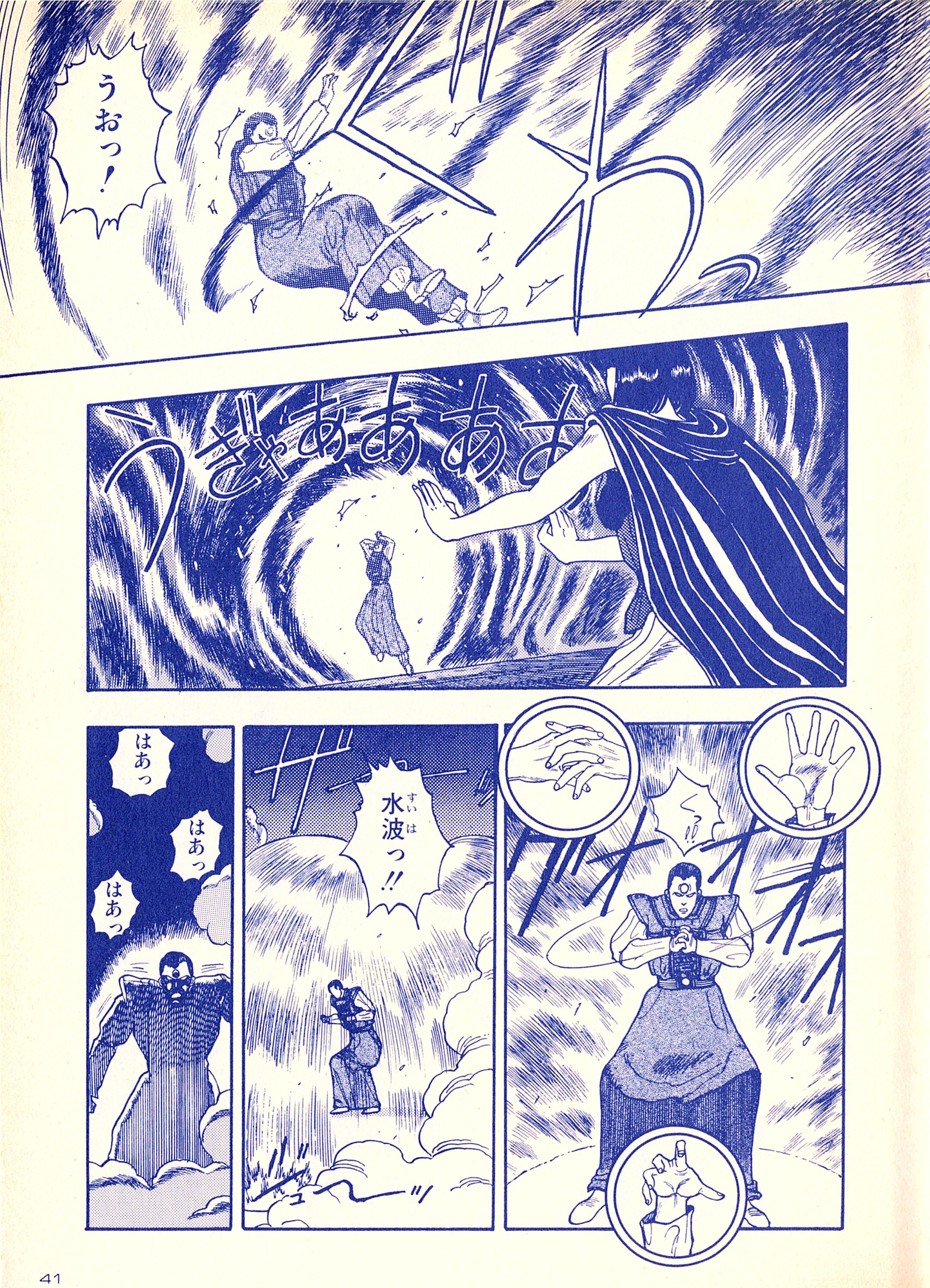

ぴ
た
これが答えか…グレイ
トン
アクィナス
あなたはまちがっている！
その錬金術で神のような永遠の、生命と魔力を手に入れたとしても
その下に たくさんのエルフ達の命と血が犠牲になるなんて 私には耐えられないわ!!
よせよせ そんなたわ言…
お前もやがて老いて死んでいくのだぞ それもシーマに捨てられ一人さびしくな…


かわいそうな人……
アクィナス
あなたは　まだ
子供なのね
人を心から
好きになった事がない


私は
シーマが好き
それは私のそばにいてくれるからでもないし私を愛してくれるからでもないの
シーマ
ごめん…
私はただシーマを愛してるそれだけで幸せなのよ
私 あなたのどこに魅かれてたのか今わかった!
世界を手に入れたとしても心を失っては奴隷と同じです
きれい事をぬかすな——っ!!
ヴァッ
ドゴッ

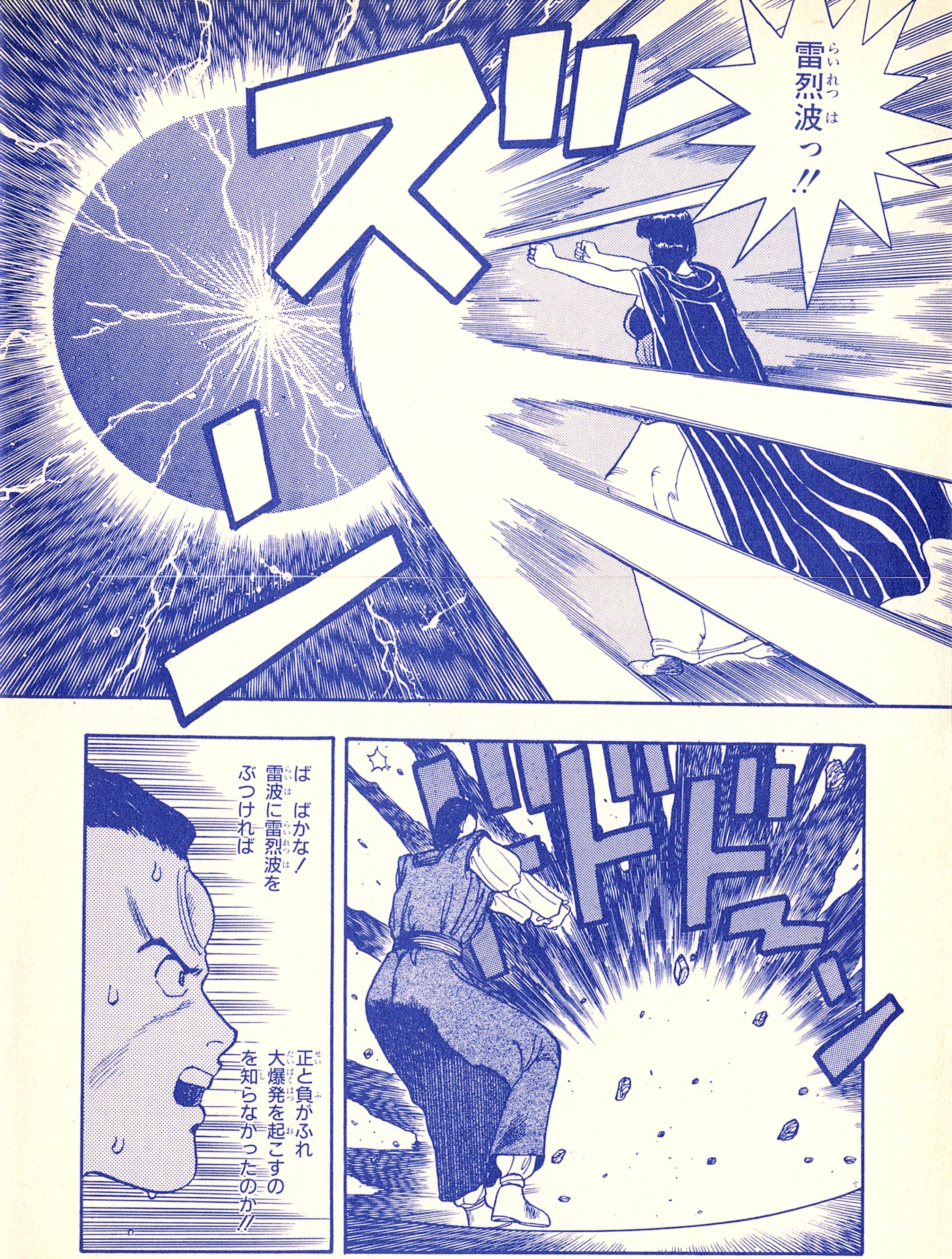

やっと心のケリがついたわアクィナス！
お前は私の兄などではない！私の師フレシアを殺した憎むべき敵だ!!
面白い！私を倒すのか？
そうよお前のその野心と共に、ほうむってやる！


炎波!!!

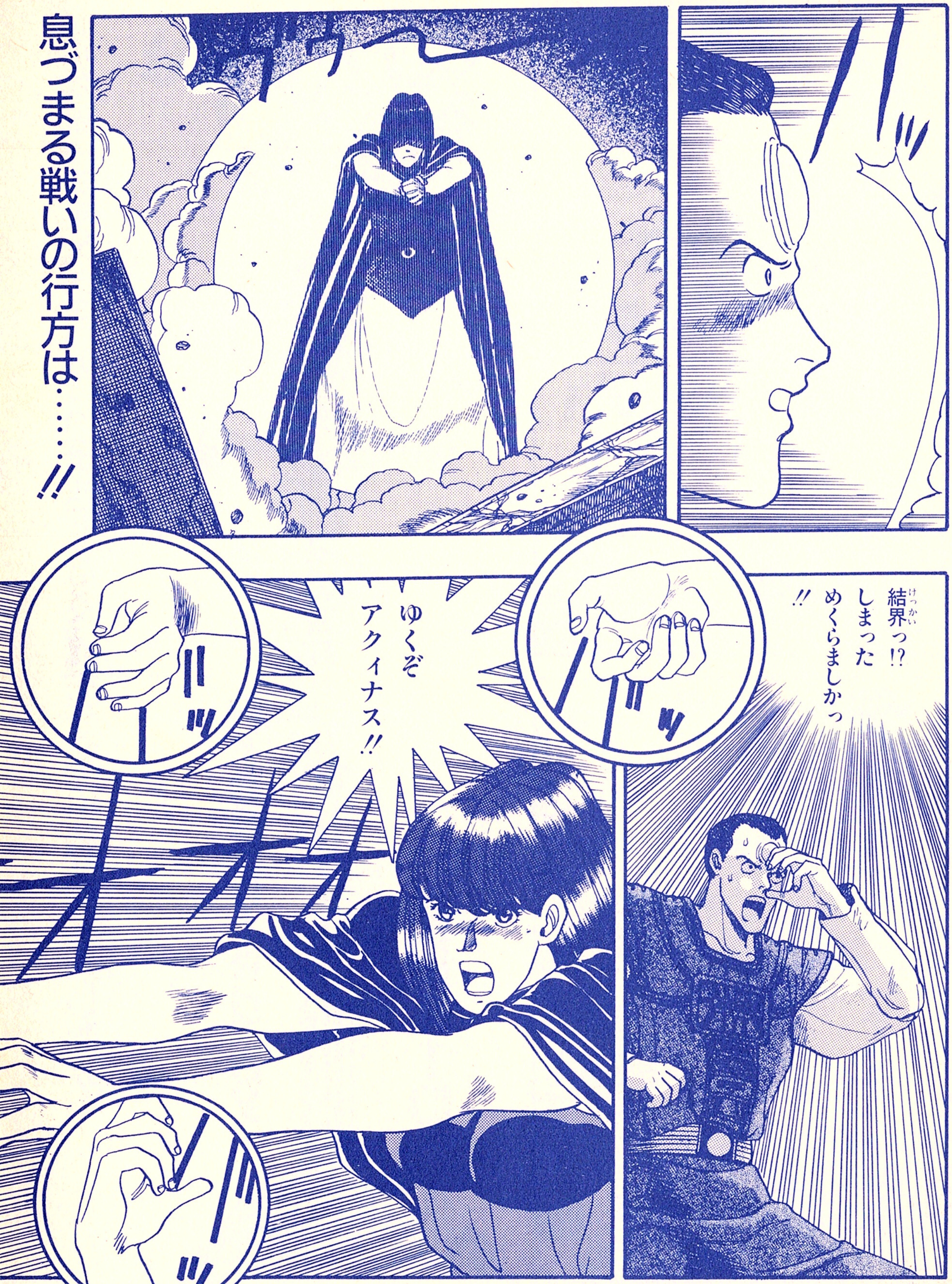

うおっ！
ドドォォッ
うぎゃあああああ
くっ!!
ゴォオオオ
水波(すいは)っ!!
ザザ―――ッ
ゴ――ッ
はあっ
はあっ
はあっ


ハァ
なんて パワーだ!!
ハァ
グレイが ここまで腕をあげていたとはっ……!!
どうした アクィナス
もう息が あがってるぞっ
むん
ますます お前が欲しくなったぞ!!
ヴヴヴヴウウウウウウウ


雷波っ!!


雷烈波っ!!
ば　ばかな!
雷波に雷烈波を
ぶつければ
正と負がふれ
大爆発を起こすの
を知らなかったのか!!

息づまる戦いの行方は……!!



次号(Vol.10 5月2日発売)につづく!!

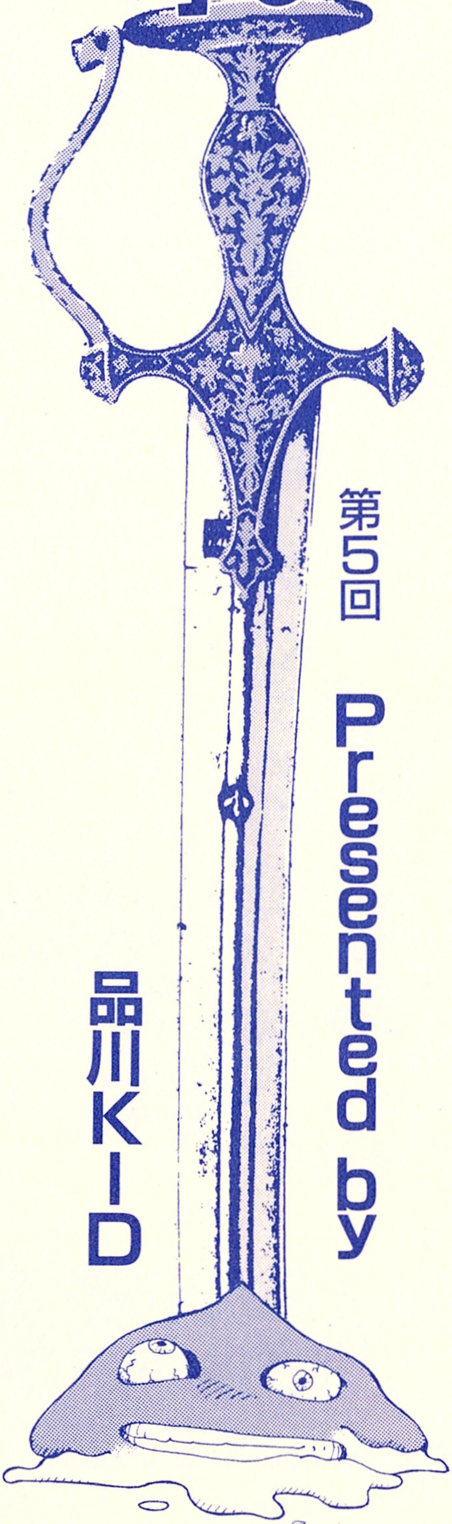
旅を続けるてっぽう丸は、予告もなく〝四コマ〟の世界に乱入した!!

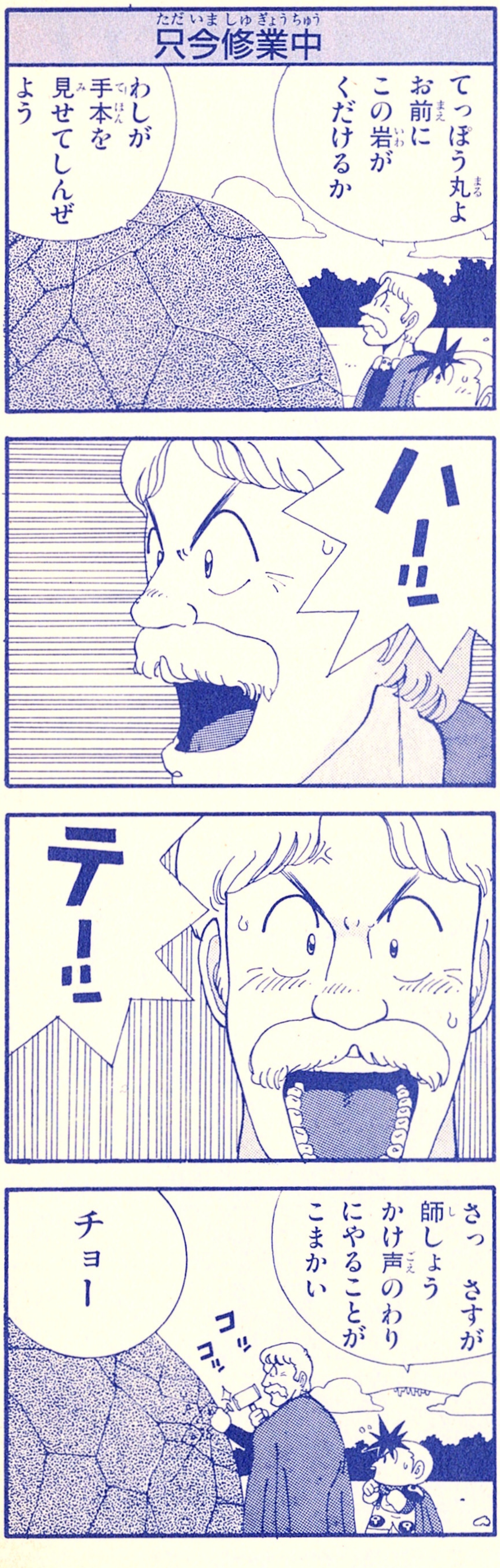
品川KIDの

死んでしまうとは何事じゃ!!

第5回

Presented by 品川KID

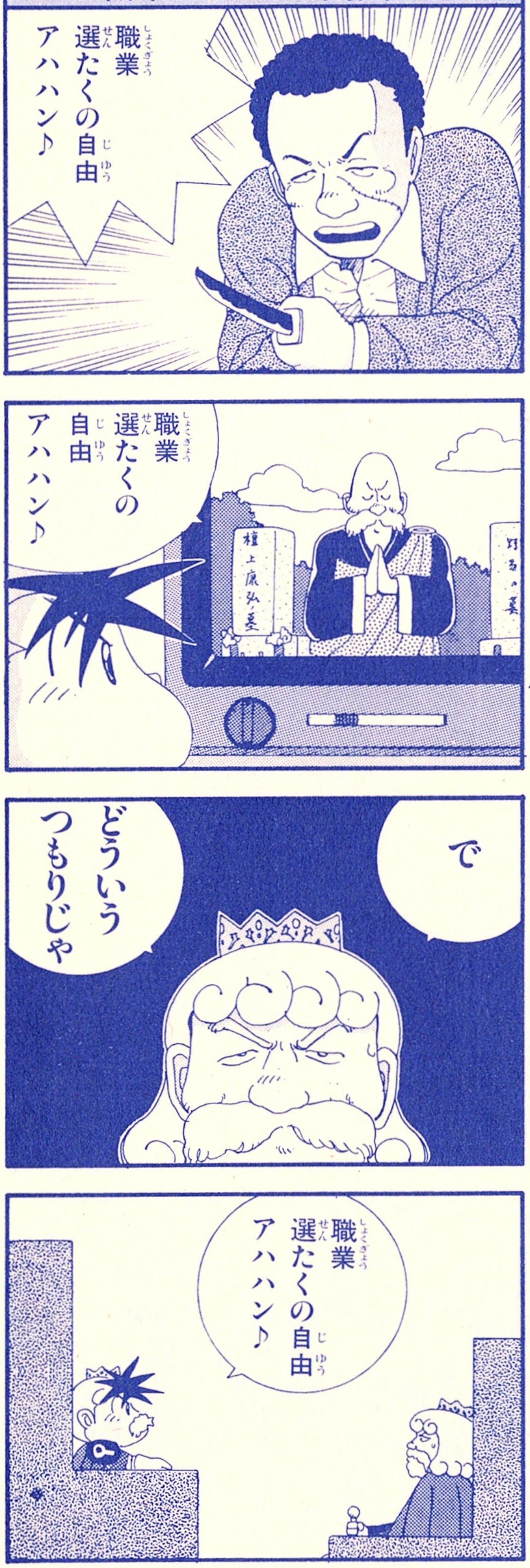




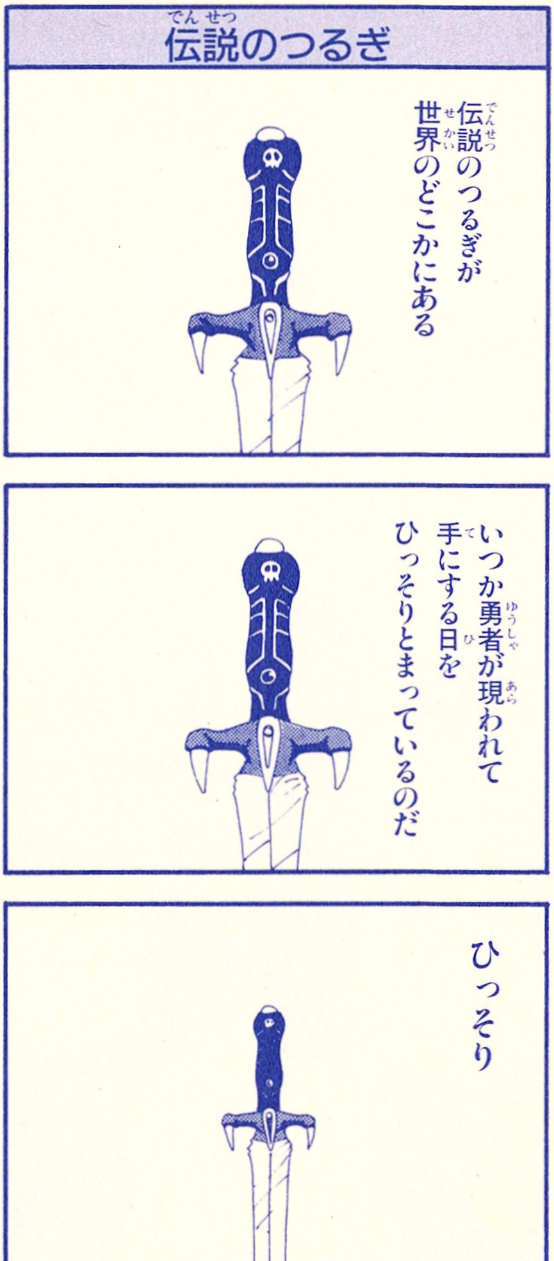
パーティ



職業選たくの自由



次号でてっぽう丸は四コマの世界を抜けだすのか!? 旅はまだまだ続く!!





TO BE CONTINUED



Wizardry・II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第14回

伝説の宝珠はもたらされた。
だが、天変地異は続く――。
ガッシュらの消息は杳として知れず
迷宮の落盤は捜索隊を呑み込んだ。
果たして、異変の原因とは何か？

作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十四章〕 宝珠

「宝珠が!?」

ザザのもたらしたニュースに、俺は上体を跳ね起こした。

王宮の中にしつらえられた居室の、不必要に柔らかなベッドに俺は寝転がっていた。冒険者の宿のロイヤルスイート並に豪華な、本来なら国賓クラスの宿泊に用いられる部屋だ。

冒険者の宿が炎上してから、すでに四時間以上が経過していた。妖獣の体液によって石化された俺は、到着した衛士隊に硬直状態のまま王宮へと運び込まれた。宿に残っていた冒険者が全滅した今、快癒を唱えられるのはマイノスに付き添っているザザしかいなかったからだ。

だが、そう簡単に治療してはもらえなかった。

アルタリウスに化けた怪物が女王を襲撃したとの報告を受けた賢者会議が、俺の躰を徹底的に調べるよう命令を下したのだ。冒険者の宿での俺の行動を見ていた者がいないうえに、発見時に石化されて身動きも取れない状態にあったとなると、俺も妖獣に同化されている恐れが充分にある、という訳だ。

この処置にディーは酷く憤慨したらしいのだが、確かに俺が賢者連中の立場なら同じことを考えただろう。あの化物を一匹でも野放しにしておけば、リルガミンの住民全員がいつの間にか妖獣に取って代わられているかも知れないのだ。

厳重な警戒のもとで俺は眼球や口腔、耳孔などを調べられた。腕から血も採られたが、これは痛覚神経が麻痺していたおかげで痛みもなく、治療呪文と同じ効果を持つ傷薬の使用で採血の跡さえ残らなかった。

これらのチェックを受け、先刻血液の分析結果が出て、ようやく石化の治療が許された。そして、詫びのつもりなのか俺の趣味に合わないこの部部に通され、仕方なく横になったところに改めてザザがやってきたのだ。

「ええ。人心地ついてからと思って、教えるのを控えてたんですよ」

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍'ル ケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアとディー、ザザは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。分裂、増殖を繰り返す妖獣に苦戦しながらも、重傷を負い生還したマイノスの援護で辛くも女王を救う三人。もうひとりの妖獣エレインが冒険者の宿に向かったのを知り、ジヴラシアとディーはすぐさま転移の呪文で跳ぶ。しかし時すでに遅く、残留組の悪の冒険者は全員妖獣の餌食となっていた。分裂した妖獣たちを全滅するべく、ディーは爆炎の呪文で宿を焼き払う。ジヴラシアは逃げ出したエレインを屠ったが、同時に石化され、同化されかけたところを謎の男に助けられたのだった——。

主な登場人物

- ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ガッシュ………レベル15の戦士。中立・人間族。
- ザザ……………レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ディー…………レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- マイノス………レベル12のロード。善・人間族。
- フレイ…………レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- エレイン………レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- 'ル ケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡〟の守護者。

ザザはふんだんに装飾の施された長椅子の中央に腕組みをして腰を下ろしていた。いつ着替えたのか、ベイキ女王との謁見時に着ていたローブではなく、ぴったりした薄手の平服姿だ。

ザザが持ってきたのは、とんでもない朗報だった。

マイノスが、あの神秘の宝珠を持ち帰っていたというのだ。

「ホールでぶっ倒れてた時には、何も持っちゃいなかったぜ。どこかに預けてきたってのか」

さすがに俺は半信半疑だった。何しろこの一年余りの迷宮探索の目的である宝珠が、よりによって妖獣の襲撃で混乱している最中に転がり込んできたのだ。

「私もね、驚きましたよ」

ザザが細い顎に手をやり、問いかけるように俺の目を見た。「マイノスは肌身離さずに宝珠を護っていたんです」

「判らねえな。遠回しな言いかたは止めてくれ」

「宝珠はこの位の大きさでしてね」

そう言ってザザは両手を、掌を上に組み合わせた。直径十センチばかりの球がすっぽり入る受け皿が出来上がる。

「宝珠を手に入れた帰途に、あの怪物に襲われたという話です。最初にエレインとアルタリウスが取り憑かれて、そこでパーティは散り散りになったとか。独りになったマイノスは最上層から脱出する間に怪物たちに襲われ、深手を負った――」

「あの傷か」

俺はマイノスのほとんど潰れているに等しい鎧と、腹部の装甲に開いたぞっとする穴を思い出した。

「右腕は潰れ、快癒以外の呪文では治りそうにない。左腕は剣。宝珠を収める袋はなく、鎧が脱げないとあっては衣服でそれを作ることもできない。しかし、宝珠を置いていくことなど考えられない。そこでマイノスは、こうしたんです」

組んだ両手を、ザザは自分の腹に当てた。

「何だ、そりゃあ？」

「装甲板の穴を宝珠が入るだけの大きさにこじ開けて、自分の体内に埋め込んだんですよ」

ザザの顔から笑みが消えていた。「腹を裂いて、その中にね」

俺は唖然として、ザザを見つめ返した。

「残りの治療呪文は、全てその傷を塞ぐのに使ったそうです」

続けるザザの目は、冗談を言っている目ではなかった。マイノスは本当にそうしたのだ。

あの女のような面をした優男が自分の腹を切り裂き、握り拳より二回りは大きい宝珠を埋め込む――それはにわかには想像できない情景だった。

俺とて、多少の失血や痛みには慣れっこだ。以前パーティでの戦闘中に腕を食いちぎられ、呪文で繋いでもらった際にも歯を食いしばって耐えたものだった。

だが、自分の臓物の中に異物をねじ込むなど、到底耐えられそうにない。それも薄い剣の切っ先ではなく、メイスの先についた鉄球ほどの大きさがある宝珠をだ。

呪文で傷を治療したとしても、気絶するほどの激痛があっただろう。その状態で迷宮から生還し、手当てを受けぬまま王宮でベイキ女王の命を救ったのだ。

あの男の外見からは思いもよらぬ、想像を絶する精神力だった。

「――治療は、済んでるんだろ」

しばらくの沈黙の後、俺の口から出たのはこの言葉だった。

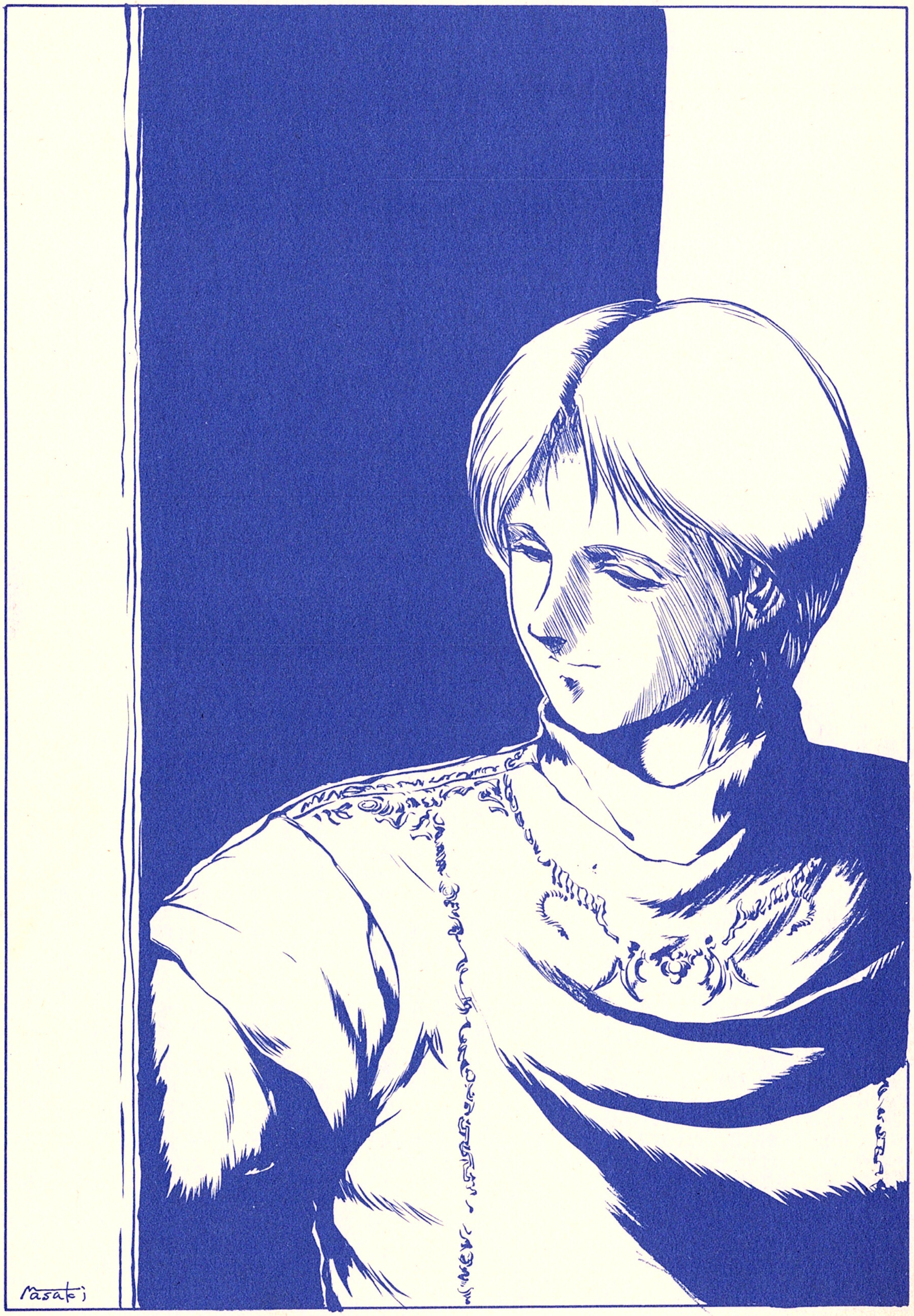
「もちろん。鎧を剥がして宝珠を摘出するのに手間取りましたがね。途中危険な状態でしたが、快癒で肉体の損傷は完治しています」

「今は？」

「別室で寝ていますよ。薬で強制的にね。快癒には恐慌などの精神状態を鎮める効果もあるんですが、マイノスの場合は精神的なダメージが大き過ぎたのか、酷く興奮したままでしてね。私が彼から聞き出せた話も、意味が判ったのはここまでです」

ザザは両肘を膝の上に突き、手を組み合わせたまま甲を上にして顎を

乗せると、意味ありげに微笑んでみせた。「そろそろ目を覚ましてもいい頃ですが、見舞いにでも行きますか」
「――人が悪いぜ。行くなんて思っちゃいないんだろうが」
　俺は多少の怒気を含んだ調子で応えた。マイノスとの相性の悪さはザザも充分に知っているからだ。
「いいえ、とんでもない」
　歳に不相応な、屈託のない笑みを浮かべてザザは言った。「まあ、どのみち後で顔を合わせることになりますよ。今夜は女王陛下と賢者会議の御老体たちとの晩餐に、あなたとディーと私、それにマイノスも招かれていますからね」
「晩餐？　何のだ」
「宝珠についての報告が賢者達から。例の化物の話もあるそうです」
「女王陛下と御会食か。俺には気乗りがしねえな。ところで、ザザよ――――」
　俺は先刻から気になっていることを口にした。「ガッシュとボルフォフ、それにフレイがどうなったのか、まだ判らねえのか」
　この問いに、ザザの笑みが一瞬強張ったのを俺は見逃さなかった。この男が動揺を表情に出すことは滅多にないだけに、厭な予感が頭を掠める。
「いい話だけじゃあ、ねえって訳か。話してくれ」
「黙っていたところですぐに知れることですからね」
　自分に言い聞かせるようにそう呟き、ザザは口を開いた。
「ガッシュたちの消息は、マイノスとはぐれた後は不明です。こちらは彼らがマイノスと同じように逃げきってくれたことを期待するしかないんですが……」
　ザザはそこで言いあぐね、やがて意を決したように言葉を続けた。「実はあなたが王宮に運ばれてきてすぐに、スケイルの入口に残っていた送迎馬車から伝令が送られてきました。迷宮内に大規模な落盤が起こり、侵入口が完全に塞がれてしまった――と」
「落盤だと！　それじゃあ――」
「ハイランスたちはまだ戻っていません」
　俺の言葉にかぶせて、ザザはそれだけを言った。が、この言葉にどれだけの意味が込められているかは、俺にもよく判っていた。
　明け方に出発した捜索隊は、もうとっくに戻ってきてもいい頃だ。それが、落盤が起きたにもかかわらずまだ一隊も帰還していない。
　まだガッシュたちを探しているとは考えられない――となると、導き出される答は決まってくる。落盤に巻き込まれたか、それともあの妖獣に襲われて壊滅したか。
　宿にいた悪の冒険者は全て殺されている。もしハイランスたちの善のパーティが全滅したとすれば、宝珠の探索者で残っているのは俺たちとディー、それにマイノスを加えた四名だけということになるのだ。
「入口が崩れてるって言ったな」
　俺の力ない呟きに、ザザは無言で頷いた。
「俺たちにはどうにもしようがねえってことか……」
「一応衛士隊が復旧作業を行っていますが、二重の落盤を引き起こす恐れがあってほとんど進んでいないそうです」
「畜生が！」
　俺は両手をベッドに叩きつけた。
　あの亀裂は、梯子山の内部に通じる唯一の侵入口だった。
　それが落盤で塞がれてしまったとなると、俺たちが迷宮に入り込む術は正確な転移の呪文で岩塊をくぐり抜けるしかない。だが、その実体化する地点も落盤で埋もれていたとしたら、待っているのは確実な死だ。
　加えて魔術師系第七レベルの呪文に属する転移を習得しているのはマスターレベルの魔術師であるディーひとりで、現在はこのレベルの使用上限である三回を使い切ってしまっている。王宮から冒険者の宿までのテレポートと、同レベルの爆炎を二度使用したためだ。
　深い睡眠による休養を取るまでマジックポイントは回復しない。危険を覚悟で転移を使うにしろ、明日までは迷宮への侵入は不可能ということになる。
　実際には他にも、迷宮の生物たちが利用している入口が多数ある筈だ



ったが、現在までに人が通れるものは発見されていない。
俺が考えを巡らせている間に、ザザは長椅子から立ち上がっていた。
「それでは後ほど。晩餐のお呼びがかかるまで、私は書庫にいますのでね」
そう言って背を向け、部屋から出て行こうとしたザザがふと、思い出したように扉の前で立ち止まった。
「ところで、ジヴ」
肩ごしに振り返ったザザと、俺の目が合った。
「何がだ」
「もし落盤がなかったなら、どうしていました？」
俺はザザが何を言おうとしているのかが判らなかった。「どうするってのは？」
「いえね」
ザザはふっと笑い、顔を戻して扉を開けた。「宝珠はもう、このリルガミンにあるんですよ。つまり、もうスケイルを探索する必要はないんです」
廊下に踏み出しながら、ザザは言った。
「それでもあなたは、連中を探しに行くつもりなんですか？」
扉の閉まる音が、広い室内に響いた。
しかしそれは、俺の耳には入らなかった。
しばらくの間、俺は石化したように身動ぎひとつできなかった。
心臓に、鋭い氷の針を突き立てられたような気分だった。
耳には、ザザの最後の台詞がこびりついている。
ザザには判っていたのだ。俺がガッシュたちを助けに行きたがっていることが。
俺たち悪の冒険者がガッシュたちの消息に気を揉んでいたのは、あくまで連中が宝珠の探索に必要な水晶を持っていたからの筈だ。宝珠なしには天変地異の原因が解明されず、ひいては自分たちの身に火の粉が降りかかってくることになる。
しかし、宝珠が手に入ったとなると事情は変わってくる。
悪の戒律の者が危険を冒してスケイルに入るのは、この宝珠を探し求めてのことだ。そしてパーティの仲間が必要なのは、怪物だらけの迷宮で少しでも生き延びる確率を高めるためなのだ。
逆に考えると、宝珠が存在しない迷宮にもはや足を踏み入れる必要はない。迷宮探索が目的で組んだパーティも、当然必要ではなくなる訳だ。
その不必要なパーティの仲間を、命懸けで救助に向かうなど愚の骨頂――それが、利己的で計算高い悪の戒律の者の見解であって然るべきなのだ。
目的は果たした。後は賢者たちに任せて、この災害を食い止める手段を講じてもらえば良い。
それはもう俺たちの知ったことじゃない。
もし俺の望みが戦いの中に身を置いた刺激的な生活だったとしても、別にその舞台がスケイルの迷宮である必然性はないのだ。
そうであるにもかかわらず、俺は怒り、苛立っている。
今の俺の感情は、戒律に反したものなのかもしれなかった。
召使が晩餐用の礼服を届けにくるまで、俺は長い間思考の袋小路を彷徨っていた。
窮屈な礼服――サイズはあつらえたように申し分なかったが――に着替え終ったところで、扉がノックされた。
「誰だ」
「あたし。御機嫌いかがかしら」
答えながら、ディーが部屋に入ってきた。俺と同じく衣装が貸し出されたらしく、昼の濃紺のローブとは打って変わった鮮紅色のドレスに身を包んでいる。
俺が着ている礼服は、白地に銀糸の刺繍が施された、フォルムは一般的だが相当な金がかかっている代物だった。俺にしてみればこんな動きにくい服を着たくはなかったのだが、そのまま晩餐に出席するにはいつもの装束は冒険者の宿での戦闘を経て汚れ過ぎていた。宿の焼失で替え

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

は全てなくなったし、わざわざ規格外のサイズの俺の躰にぴったりくる衣装を用意させた女王への、一応の敬意を払うという意味で着用を承諾したのだ。

ディーは俺の爪先から頭の天辺まで吟味するように眺めると、ゆっくりと何度も頷いた。

「意外と似合うじゃない。野暮ったい忍者装束より数段男前に見えるわよ。今までその手の恰好をしなかったのがもったいないくらい」

「よしてくれ」

俺は肩をすくめた。「こんなのが似合うはザザか、マイノスの野郎だろうよ。本当なら今すぐ脱いじまいたい気分だ」

「お世辞なんて言わないわ」

ディーは両肘を軽く上げて自分のドレスを覗き込んだ。「悪くはないんだけど、ちょっと色が合わないわね。あんたにその服を貸したんだったら、あたしは――そうね、もう少し淡い色のドレスだったら釣り合いが取れそうだわ。せめて衣装だけでも持ち出したかったわねえ」

天井を仰ぎ、ディーはため息をついた。相当な衣装持ちだっただけに、止むを得ないとはいえ、自ら冒険者の宿を燃やしてしまったのが悔やまれるのだろう。

「ところで」

ディーが話を切り替えた。「あたしが御機嫌伺いだけにきたんじゃないことくらい判るわよね。会食の前にあんたと話しときたいことがあるのよ」

「何だ」

「あの男よ」

ディーが言っているのは、奇妙な魔法で妖獣から俺を救った長身の男のことだった。石化した俺のそばに駆け寄って来た際に、ディーはこの男を目にしている。

しかし衛士隊が到着した時には、あの男は俺たちに気づかぬうちに煙のように姿を消してしまっていた。

「気になったんでね。ちょっと探してみたのよ」

「今まで姿を見せなかったのは、そのせいか」

「そう。聞き込みに忙しくてね。あれだけ目立つ風体の割りに、見たって奴が少な過ぎるのよ」

俺はあの男の姿を思い起こした。全身を群青色のローブで包み、顔をベールで覆った二メートル近い身長の男だ。否が応でも人目を引く恰好であることは間違いなかった。

「で、見つかったのか」

「まあね」

手を腰に当てて、ディーは胸を反らせた。

「ボルタック商店に賓客としてもてなされてるわ。何でも、相当な品物を幾つか持ち込んだとかでね」

「ボルタック商店に？」

ボルタック商店とは、リルガミン王国に限らず各地に数多くの分店を持つ武具商だ。武器売買に限らず、正体不明の品の鑑定や専門僧との契約による呪われた品物の解呪などを手広く扱っており、リルガミン市では最大の品揃えを誇っている。

売値が買値の二倍という強引な商法だが、破損時の保証や防具のサイズ調整などのアフターケアが万全のため利用者は多い。特に魔法のかかった品は高く売れるので、俺たちも含めた冒険者の多くは、迷宮で見つけた武具で不要なものはここに持ち込んで換金していた。

しかし、ボルタックが店をあげて歓迎するほどの品となると少々想像がつきかねた。あの男は一体何を持ち込んだというのだろう？

「店主には話をつけてきたわ。あたしがあの男に興味があるから、出かけるようなら使いを頂戴ってね」

色恋の手助けだと思わせた訳だ。それなら店主も訝ることなく協力してくれるだろう。

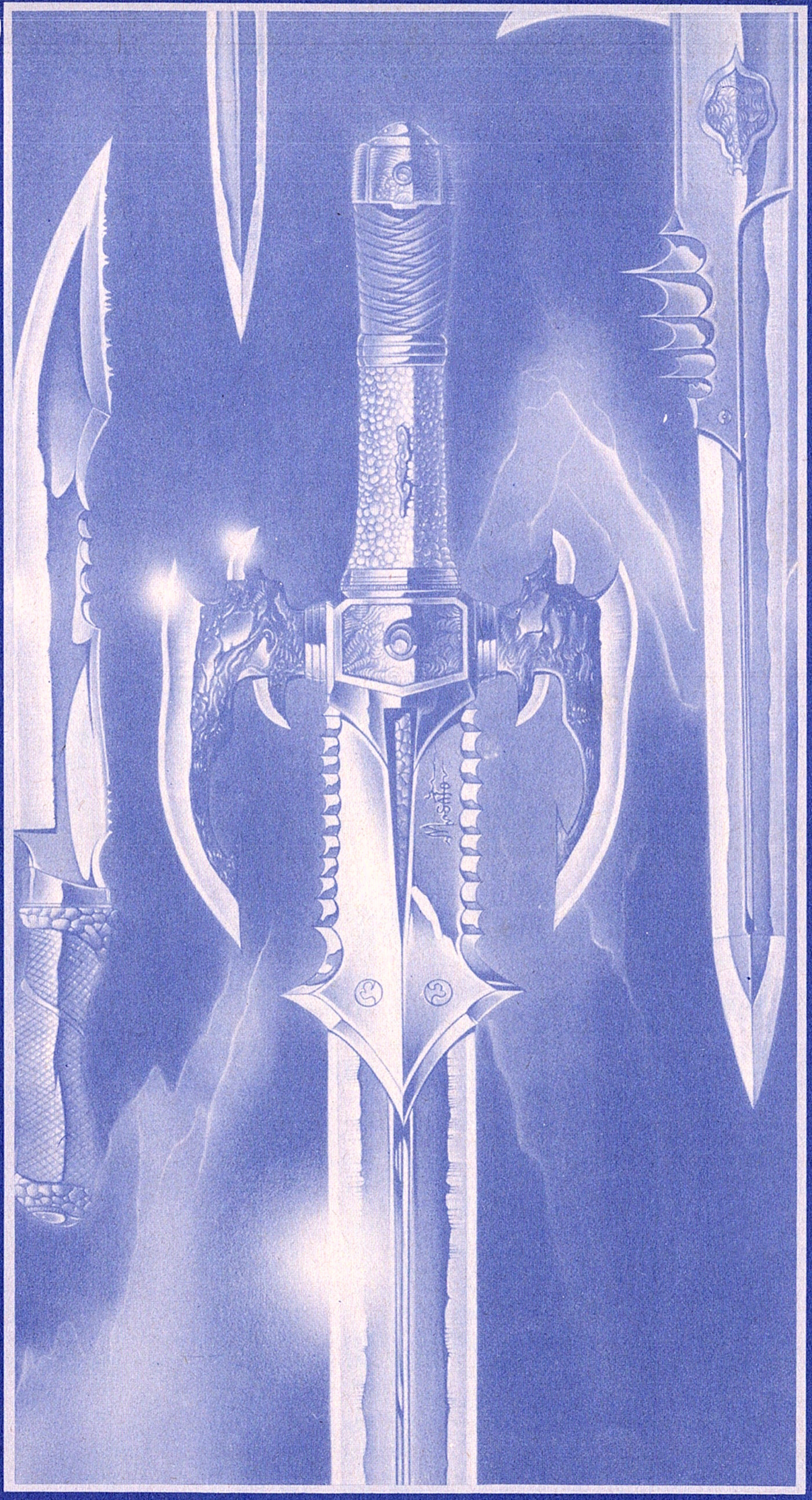
その時、廊下から召使いらしき足音が聴こえてきた。

晩餐の用意が整ったようだった。

（次号につづく）

特報!!
小説ウィザードリィ・シナリオ4「ワードナの逆襲」 手塚一郎・著
6月上旬単行本化決定!! 予約受付中!!

●本誌Vol.2号で別冊ふろくとして登場した同小説に大幅な加筆!新たなウィズ世界に御期待ください!



▶ファンタジーランドは
(P104)からお読み下さい。